

研究ノート

昭和58年度「英語B」解答の分析結果からみた問題の評価(解答分析その14)

熊本大学教育学部教授 福田 昇 八

はじめに

58年度英語Bは339,652人が受験し、平均点は118.96点であった。共通1次試験は、100点換算の平均点が60点になることを目標として出題され、平均50点前後であればむずかしすぎる出題といわれる。英語Bの場合、54年度に62.8で始まり、続いて47.1, 53.8, 57.8になり、58年度には59.5になった。この年度の特徴として、まず分量を減らし、設問数を60問にして受験生に時間的余裕を与え、次に内容と形式の面でいくつかの工夫を加えたことが挙げられる。このような出題者側の意図がどのような結果を生んだかを、以下、解答率を示すグラフを参考にして見てゆくことにしたい。

各グラフの上欄の数字は順に、大問一設問番号一解答番号を示す。グラフの横軸は、英語Bの受験者を総得点に従って20%ずつに分け、最下位群から最上位群まで順にL, LM, M, MH, Hの記号で表わしてある。太線は正答

率を、細線は誤答率を示す。右端の数字は選択肢の中の番号である。太線の右端が80~100点の間であれば、その設問は受験生の学力に合った問題であることを示し、80から下がるほど、むずかしすぎる問題であることを示す。太線が上にふくらんだ、特に上辺にはりついた形の曲線は、やさしすぎる問題であることを示し、逆に下に下がった形の曲線は、解答に相当な英語力を要する問題であることを示している。ほぼ直線の場合は、適正な難易度の問題と考えてよいであろう。

すべての設問について選択肢は少なくとも4つあるから、細線が3本あればすべての選択肢が選ばれたこと、いいかえれば、すべての選択肢が選択肢として機能したことを示す。逆に、細線がゼロか1本の場合は、選択肢があまり意味を持たなかったことを示している。この意味では、細線が多いほど良問ということになる。しかし、まぎらわしい選択肢を出せば細線は増えるから、細線の数と問題の良否は決して比例するものではない。さらに出題に

あたっては、やさしい設問とむずかしい設問を組み合わせ、全体として平均60点になっているのが良問と考えるべきであろう。

1 大問Iについて

これはアクセントのある母音の発音がほかの3つの場合と異なるものを選ぶ問題である。アクセントと発音の組み合わせは初めての試みで、すっかりした出題形式であるが、正答率は最高59%、最低34%、平均48%とかなりむずかしい問題であった。

まず、正答率59%の2つの設問とそのグラフを示す。

問7 ① academy ② accident

③ accuse ④ alcohol

問10 ① image ② income

③ intimate ④ island

グラフを見ると、両方とも太線はほぼ直線に近く、その右端は80~100%の枠に入り、細線は3本ある。この2つは模範的な良問と考えてよいであろう。

次に、Iで最も正答率の低い問8(34%)と問4(41%)の設問とグラフを示す。

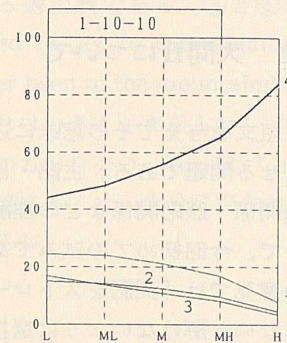
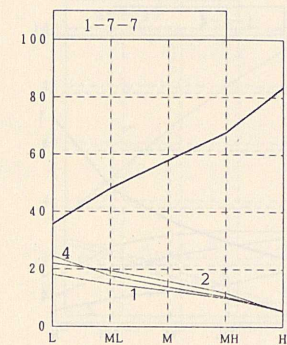
問4 ① average ② hatred

③ persuade ④ stranger

問8 ① complaint ② complicated

③ compliment

④ compromise



Iの10問中、細線3本が7つ、2本が1つで、1本なのは次の2つである。

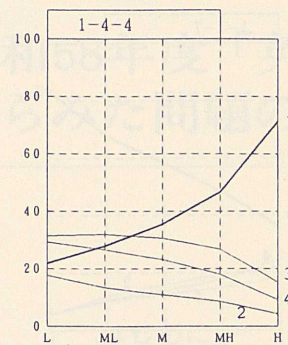
問2 ① continue ② contribute

③ discover ④ particular

問3 ① holiday ② modest

③ policy ④ stomach

問2は正答③の50%に対し、誤答は②に30%が集中し、問3は正答④の53%に対し、誤答は②に33%が集中している。

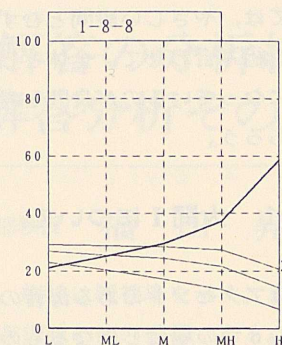


2 大問IIについて

これは短文を与えてその意味に近い文を選ばせる問題である。主語・目的語・修飾関係・照応関係などの理解を試すもので、今回初めての試みである。高校側の意見では「英語をストレートに理解しないと解けないように選択肢が工夫されており、注意力を要する良問」(『昭和58年度共通第1次学力試験の試験問題に関する意見・評価』)であり、全体の成績は72%と大変よかった。ただし、グラフを見ると細線が2本以上あるのは8問中3問で、特に次の4問はやさしすぎる問題であった。選択肢は正答(カッコ内はその率)と細線に出ている誤答のみを示す。

問1 The man I want to visit is Harold.

① I want to visit Harold.



(83%)

② I want Harold to visit me.

問2 I know a better doctor than Sam does.

④ The doctor I know is better than the doctor Sam knows. (82%)

① The doctor I know is better than Sam.

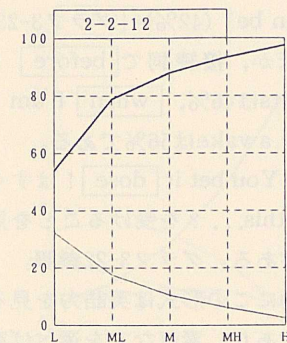
問3 What is hard to put up with is his over-politeness.

② It is his over-politeness that I find difficult to put up with. (80%)

④ I dislike him although he is polite enough.

問6 Jane said that Bob had evidently taken money from Beth.

③ According to Jane's evidence, Bob stole money



from Beth. (84%) (細線なし)

以上についてのグラフは大体似たような曲線になっているので問2のグラフだけを示す。下に問題文を示す3つは、問7のグラフの曲線と同じ傾向を示している。正答率はいずれも67%前後で、ほぼ適正難易度であると見られる。

問4 News arrived this morning of heavy rain in the Kanto area.

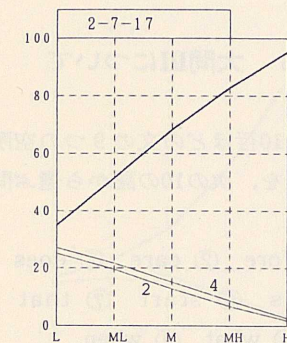
問5 I persuaded Susan to be examined by Harry.

問7 The capture of the prince by the king led to another war.

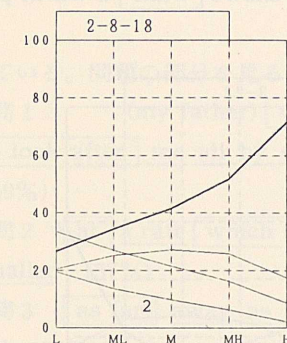
IIでは、ただ1つ問8だけは正答率45%で、むずかしい問題である。

問8 If he hasn't done so yet, Luke should try to get to the mountain top.

右のグラフで①と②はEven ifで始



まる選択肢である。③と④の違いは tried to get to the mountain topと ever been to the mountainのところで、これはいささかまぎらわしい区別であるかもしれない。「山に行く」と「山頂に達する」は、十分区別されそうではあるが。



3 大問Ⅲについて

これは10行ほどの文の9つの空所に入れる語を、次の10の語から選ぶ問題である。

① before ② care ③ does ④ in ⑤ is ⑥ start ⑦ that ⑧ there ⑨ what ⑩ when

まず、正答率の高いのを見ると、something cheerful to start my day (79%)

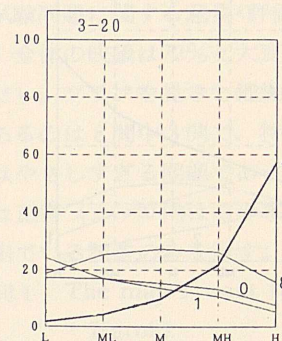
A little water here and there (70%)

take care of me (95%)

次に、正答率の低いのを見ると、the first room I spend time in in the morning (19%) [グラフ3-20]

a nice give-and-take that starts the day off (33%)

it also shows what a warm per-

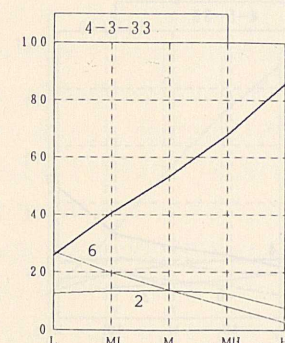
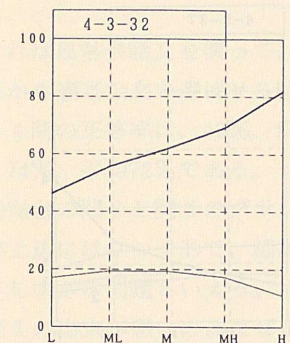
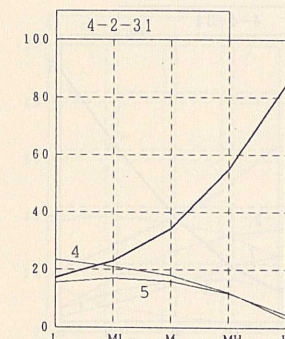
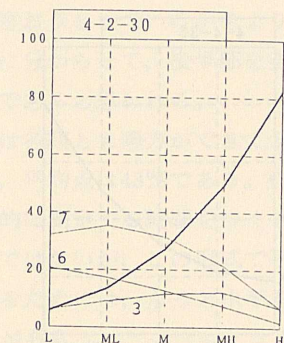
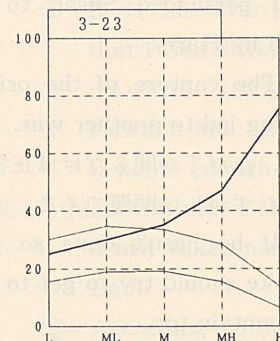
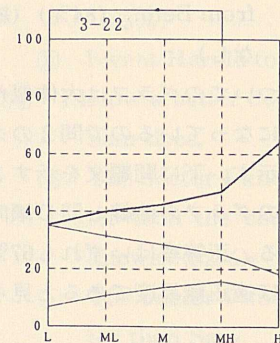


son I can be (42%) [グラフ3-23]

このほか、接続詞で before the day startsは46%, when I am not yet fully awakeは56%である。

最後にYou bet it dose !はすぐ前のDoes this...?を受けることを見抜く必要がある。グラフ3-22参照。

全体的にこの形式は英語力を見るのに適切であり、素直な文を選べば客観テストに絶好の形式と考えられる。



4 大問Ⅳについて

これは英文を書く力を見る問題で、5問のうち3問は従来通り日本文を与えて空所を埋めさせるもの、残る2問は図形を与えてその説明文の空所を埋めさせるものとなっている。7つの選択肢から5つの空所に入れるのを選び、そのうちの2つを答えさせる形式にな

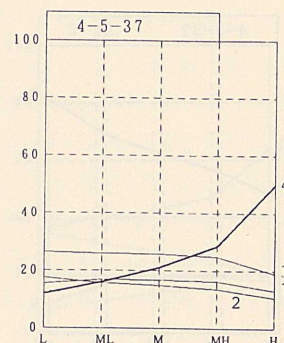
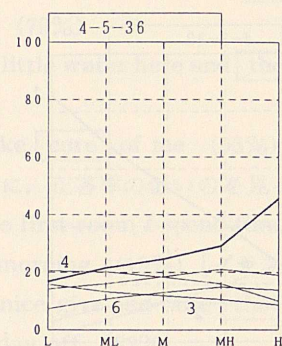
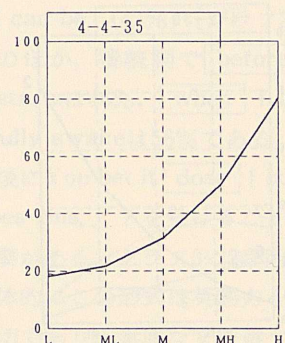
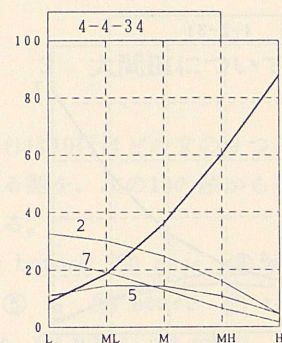
っている。問題の部分を見ると、

問1 (my father) was left to look after me all by (himself) (59%)

問2 at a rate which is never equalled (37%)

問3 as far away as a man with (55%)

問1のグラフは割愛したが、上に示す問2、3のグラフをくらべてみると、



左と右の太線の形は、問2のはほぼ同じ(問1のも同じ)なのに、問3のグラフは左の「as far」が中位群Mまではよく出来たことを示している。このことは、問1問2では2つの空所が連動しているのに対し、問3では最下位群でも半数近くがas farという表現をよく知っていたためと考えてよいであろう。

日本文の代りに図形を使った新形式

の問題は、問4が39%、問5が24%と極めて悪い成績であった。上のグラフを見れば、太線の形はほぼ同じで、両方できたか、できないかであったことが分かる。問4は最上位群は80%に達しているのに、問5では50%にも達していない。これは問題のつくり方に無理があることを示している。もっと答えやすくするためには、文の前半を問うのではなく、前半は与えておいて、

何を言おうとしているかをよりよく受験生に分らせて、後半部を空所にすべきであると思われる。

IVは各問とも両方ができて5点の配点で、平均点は43%である。作文力を客観的に測定する問題をつくることは容易ではないが、この形式で平均60%にするためには、もっと水準を下げる必要がある。

5 大問Vについて

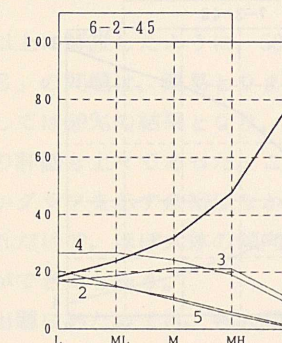
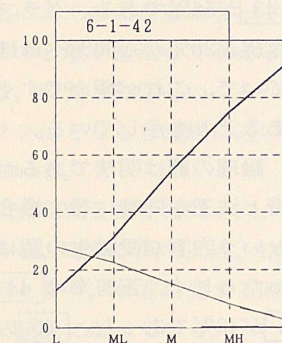
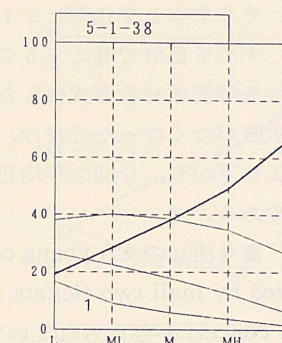
これは日常会話文を使って、対話の流れから適当な文を選ばせる問題である。4問の正答率は、40%、87%、85%、74%、平均72%である。

80%台の問2と問3のグラフは、太線が上辺にはりつく形で、細線はなく、やさしすぎる問題といえる。

問1の出来が悪いのはなぜか。これはWould you like . . . ?に対してI guess I'd rather not.という返答を思いつかず、代りによく知っている諺にひかれて、③It's no use crying over spilt milk, so forget it.を選んだ者が多いためである。

6 大問VIについて

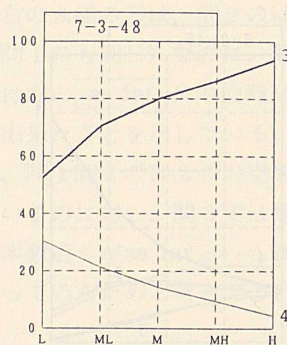
これはパラグラフを構成する文の順序を考えさせる問題である。従来は、いくつかの配列の型を選択肢として与



えていた。そうするとそれがヒントになるので、すべて自分で考えて5つのうちの2つを解答させる方式にした。当然、選択肢がなくなった分だけ、成績は従来より下がり、今回の平均正答率は48%である。

問1は、書き出しの文A young couple received by mail two tickets for a popular concert.が与えられていて、以下、若夫婦と泥棒の動きを描く文を組み立てる問題である。正答率は42%が53%、43%が56%である。グラフは両方とも太線が20%から90%へほぼ直線に延びていて、これが極めてすぐれた問題であることを示している。

問2は、論理の筋は明快であるが、ローマ皇帝と法王を同時に殺す機会を逃した話という内容が受験生の頭に入りにくかったらしく、正答率は44%が44%、45%が40%であった。45%のグラフには、珍しいことに細線が4本出

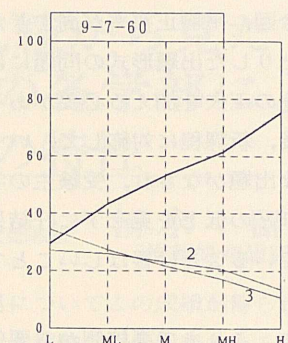
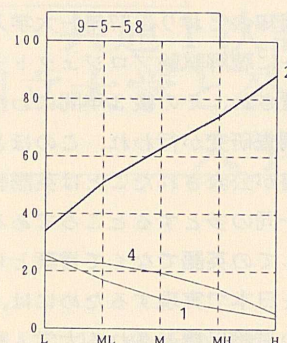
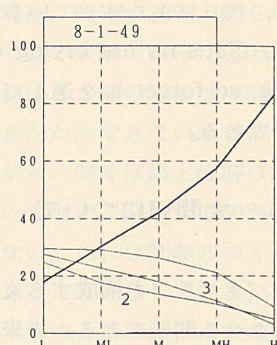


ている。ここでは、仮定法過去完了形④ Otherwise I should have been given immortal fame.が読めたかどうか得点の鍵であったと思われる。

7 大問Ⅶ-Ⅸについて

Ⅶ以下の3問は読解力を試す問題である。従来、読解力には4問が当てられていたが、今回は1問減らして受験生が最後の問題まで無理なく取り組めるようになっている。設問の形式についてもすっきりさせ、下線部についての質問を全面的にやめ、設問はすべて内容に関する文を完成させる形になっている。

Ⅶは日常的な題材についての約100語(10行)の文章である。3つの設問の正答率は87%、75%、77%である。平均は79%で、これは全9問中最高の成績である。各問のグラフの太線は、



下に示す問3のグラフと同じように上にふくらんでいる。

Ⅷは約20行の論説文である。ダーウィンの進化論を機械の発達に応用させた科学的な読み物であるが、受験生は読みこなすのに苦労したようで、平均正答率は47%である。下に示すのは正答率46%の問1のグラフである。問2の正答率は39%、問3と問4が53%、問5が42%となっており、そのグラフの太線は問1のとはよく似ている。そして細線はすべてに3本出ている。

Ⅸは1ページ分の長さの心理描写である。夜ひとりで本を読んでいるのを誰かに見られているのではないかという恐怖感を伝える文学的な文章だが、平均74%の好成績であった。まぎらわしさを避けた、わかりやすい設問で、正答率は、問1が69%、問2が92%、問3と問4は82%、問6は81%と極めて高く、グラフの太線はⅦと同じよう

な上にふくらんだ形になっている。主人公の心理を推測して答える問5と問7は、62%と53%といくらか低率で、グラフはどちらも直線に近い太線を示している。

配点はⅦとⅨは各問4点、Ⅷは5点である。Ⅷは5問で25点、Ⅸは7問で28点となり、解答に要する時間に見合った配点になっている。

おわりに

以上に解説したように、58年度「英語B」の問題は、難易とりまぜて全体としては60%の結果となり、高校側からの評価も上々であった。ここには25しかグラフを示す余裕はなかったが、これだけで、ほぼ大体の傾向は示すことができたと思う。

出題にあたっては、各大問間の設問に多少の難易差をつけるのは当然であ

るが、今回、平均正答率が高すぎたり低すぎたりした出題形式の問題には、いっそうの工夫を加える必要がある。

その後、新課程に対応して、いっそう平易な出題がなされ、受験生の学力がそれほどの低下を見せずに好結果が得られていることは喜ばしいことである。

最後に、これまで高校側から要望の強かった音声テストの導入についてふれておきたい。58年度問題についていえば、少なくともⅠとⅤの40点分は音声テストによって行われるべきもので

ある。周知のとおり、57年、大学入試センターに聴解試験プロジェクトチームが設置され、その後3年間にわたる専門的調査研究が行われ、このほどその報告書が公表されたことは英語教育関係者一同の多とするところである。学問としての英語でなくて言葉としての英語を日本で実現するためには、英語教育の最終目標とされる大学入試に音声テストが導入されることが、最大の教育効果を持つ。いつの日かそのような時代が来ることを念じつつ、58年度の評価をおわる。